



TV Animation Series

V O L U M E F I V E

©BCE / Project Engage



TV Animation Series Engage Kiss 5





優しく  
愚かな嘘  
~Kisara~

丸戸史明

WIKS

人間は、敵だ。

我らより弱いくせに我が物顔で増え続け、我らが隠れて暮らすことも許さず、我らの住処を奪っていく。

人間は、裏切り者だ。

初めは我らと敵対しておいて、旗色が悪くなると擦り寄ってくる。

うっかり心を許してしまうと、後になって急に牙を剥いて襲ってくる。

私のような、妖と人の間に生まれた子すら皆殺しにしようとする。

そして父は、人間だ。

だから母は、自分にあまり父の話をしなかった。

父のことを聞いても、ただ、寂しそうに笑うだけだった。

人里離れた山の奥、母が張り巡らした結界の中で息を潜めて暮らした。

退屈と、無為と、静寂だけが支配する日々。

あまりに持て余す好奇心ゆえ、いつしか私は、裏切り者である人間の暮らしすら夢想し、やがて相見えることを望んだりもした。

けれどその願いは、またしても母を狙う人間の欲望によって閉ざされ……  
そして私は、永い眠りについた。

「戦いに来たんじゃない…契約しに来たんだ……っ」

「お前の力が……お前が欲しいんだ！」

そして、私が眠りについてから悠久の時間を経て、ふたたび人間が、目の前に現れた。

妖を滅ぼし、母を裏切り、私から全てを奪った人間が現れた。

あれから何年経っていたのかは知らないが、それが数年、数十年ではないことは、奴らの戦い方から容易に想像できた。

奴らは、強かった。

火を噴く武器を使い、人間離れた力を持ち、目覚めたばかりとはいえ、妖である私をたった二人で抑え込んだ。どうやら私が封じられている間に、妖の時代は終わったらしい。

いや、とつくに終わっていたのだ。

母が人間の手にかかった、あの時に。

だが……

「まったく、なんなんだよこは。日本で九月に大雪なんて聞いたことないぞ」

「ヴ……」

「まさかこれも、お前のかけた呪いなのか？」

「……？」

「とりあえず、今は暴れないでくれよ？ シャロンが追っかけてくる前に、山を下りちまわらないとな」けれど、その裏切り者は、まるで大事なものを扱うかのように、私を毛布に包み、自分の腕にそっつと抱え

「初めまして悪魔ちゃん。俺はシユウ、お前の遠い血縁で……ま、新しいパートナーだ」

そして、吹雪で冷え切った頬を、図々しく私の頬にこすりつけてきた。

……冷たくて、不快で、引き裂いてやりたかった。



## 優しく愚かな嘘

~Kisara~

丸戸史明

Engage Kiss (Volume Five) Special novel  
by Fumiaki Maruto



「悪魔キサラよ……俺の、三日前の記憶を代償に、俺に従え。一時間でいい」

その裏切り者の男は、山を下りるとすぐ人のいない小屋に逃げ込み、私を剣で床に縫い付け、たどたどしい契約の呪言とともに、私の手を、自分の頭に触れさせた。

「なあシュウ……これからも、私と組まないか？」

「っ!?」

……と、その瞬間、私の中に、言葉と力の両方が流れ込む。

「らしくないなシャロン。教会の人間がフリーの悪魔狩りと手を組もうなんて」

「お前となら、今以上に凶悪な悪魔を倒すこともできる。それは私が今まで通り教会にいるよりも、よほど教会の益になる……そういう風には考えられないか？」

「なるほど、ね……って、おい、どういうつもりだよ？」

流れ込む力により私の五感が徐々に活動し始めると、今度は臉の裏に、その声と繋がる映像までもが浮かんでくる。

「シュウよ……私に、興味はないか？」

「そりゃ、ま……」

目の前に、奇妙な服を着た女——あの時、突然私を蹴り飛ばした忌々しい女狐だ——が、その見たこともない衣装を一枚、一枚と脱ぎ捨てながら、こちらに卑猥な視線を向けてきている。

「なら、さっきの話は一時保留で……少し楽しんだら、また話し合おうじゃないか」

「シャロン、お前……」

どうやら、かなりいい加減な言い回しだったのにもかかわらず、男の呪言はそこそこ正しく発動したようだ。つまりこれは、この男の記憶。

他の女との肉欲の記憶をもつて私を従わせようとする、その腐った性根に吐き気がしたが、それでも背に腹は代えられない。

私は喉に、脳に、この女の猥雑な声とふしだらな姿を流し込み、そして自らの力へと変えていく。力は貰う。だが、従いはしない。

この男の、中途半端な契約の穴を突き、蘇った力で、この男の喉を切り裂いて……

「シュウ……裏切ったのか……っ」

「ごめんね？ 俺の欲しかったの、金じゃないんだ」

「まさかお前、あの悪魔を……？」

「教会に奪われる訳にはいかない……あいつは俺の、大事な道具だ」

と、男のこめかみを貫こうと思った瞬間……

私に流れ込んできている記憶の物語が、何やら妙な方向へと展開していく。

女狐は体を不自然に痙攣させ、顔は苦痛と驚愕と憎しみに歪み、口の端からは泡を吹き始めていた。

どうやらこいつは、誘惑しようとした男に騙され、一服盛られた上に、あの悪魔……つまり私を、奪われたらしい。要するに、大事な女である私と天秤にかけられ、無残にも捨てられたということだ。

やはりあの男は、生粋の裏切り者だったのだ。

私は、最悪の男に捕らわれてしまった……

「殺す……いつか殺す……っ」

女の怨嗟の聲が、どんどん私の中に流れ込み、私の力へと変わろうとしている。

けれど私は、急ぎこの記憶の消費を拒み、自らの記憶として残す決断をした。

すでに最初の方の記憶は少し欠落してしまっただが、この最後の記憶だけは消す訳にはいかない。

憎き変態女が惨めに捨てられる様と、この女ではなく私が男に選ばれたという事実を忘れるのは、どうにも勿体なかったからだ。

「キサラ、あれがベイロンシティ……お前の同族で溢れかえる街だよ」

「べいろん……？」

それから彼は、私をまるで姫のように扱った。  
今まで見たこともないような色鮮やかな服を着せ、豪華絢爛な食事を与え、そして言葉を覚えさせ……いや、思いださせた。

やはりこの男にとって、私はとても大切な女であるようだ。

人間で、裏切り者ではあるが、私に対する思慕は本物のようだ。

ならば、もうしばらく契約を続けてもいいのかもしれない。

どうせ飽きたら殺せばいいだけだ。

※ ※ ※

ベイロンシティには、確かにわたしの。同族<sup>ドーム</sup>がいた。

人の倍も背丈があつたり、人とは似ても似つかぬ姿形をしていたり、人を軽く捻り潰してしまうほどの怪力を持っていたりと、その特徴は様々だったけれど、ただ一つだけ共通していることがあった。

「悪魔キサラよ。俺の、去年の三月の記憶を代償に、奴を倒せ……」

「……承知した」

わたしの力をもってすれば、敵ではないということだ。

「う、うああ……うわああああ……っ」

シュウの苦鳴<sup>くめい</sup>とともに、彼の記憶が頭の中に流れ込む。

わたしはいつも通り、その色と音と匂いと味と触り心地を確かめ、そして破壊の力へと変えるために忘れようとして……

「何やってるのよシュウ！ あんた、そのコは……っ!?」

「出ていく……？ 私の部屋から？」

「っ!?」

けれど、今、頭の中にある声と、今、耳から入ってきた声の完全な一致に、思わず動作を止めてしまう。

「あ、悪魔……？ シュウ、あなたなんてことを！」

「私が家事なんにもできないから？ 全部シュウに任せきりだから？」

わたしの前には、銃を構えた長い髪の女。

その女から発せられる厳しい叱責の声は、しかし全く同じ声音の、甘えた泣き声にかき消されてしまう。  
なんなの、この女？

今まで見たこともないのに、わたしの心を妙にざわつかせ、苛つかせるこの声は……

「アヤノ……さん。大丈夫だから、そいつは……っ」

「アヤ……ノ？」

違う、初めてではない。

わたしは、この女のことを、以前から知っている。

シュウから譲り受け、そして力へと変えてしまった記憶の中に、確かにその名があった。

その瞳が、その髪が、その声が、その肌触りが、あった。

もう、はつきりとは思いつけないけれど、諦めきれない未練が聞こえた。割り切れない思いが匂った。  
けれど、けれど……

もう、それしか残っていない。

この女のことを、わからない。

この女と共にいた頃の、シュウのことが、わからない。

「う、うああ……うわああああ……」

その、わからないという苛つきとともに、わたしの剣が振り下ろされる。

わたしよりも背丈が高く、わたしよりも禍々しい妖——いや、この世では悪魔というのだった——が、一瞬で塵へと化していく。



けれどわたしの心の霽はらは、そんなに簡単に晴れてくれはしなかった。だって、わかんない。わかってしまったから。

この女が何者なのか、シユウとどんな過去があったのかがわからないのに。なのに、この女にとってシユウが特別で、そしてシユウにとってこの女が特別だということがわかってしまったから。

「はあつ、はあつ、はああああ……っ」

息が今までにないほど荒い。

心臓が今までにないほど跳ね上がる。

……当然だ。シユウから流れてきた記憶を使わなかったから。

あの女の泣き声も、泣き顔も、消さぬまま力を振るつたから。

これは回復までに、長い時間がかかるかもしれない。

けれど仕方ない。

シユウのことがわからない。ということの不愉快さに比べたら、この程度……

※ ※ ※

「キサラ、次の仕事だ。オールドタウンの公園にC級が一体出現した」

「ええ？ 先週も仕事したばかりじゃない……」

それから、シユウとは何度も体を……じゃない、契約を重ねた。

けれどしばらくすると、自分の体に、困ったことが起き始めた。

「お前なら朝飯前だろ？ 力が足りないなら二か月分差し出すからさ」

「う、うん……」

シユウは、契約の代償に自分の記憶を捧げ、そしてわたしの力を求める。

けれどこの頃のわたしは、シユウの記憶を消費せずに自分の中に留め続けていた。

おかげで彼が、アヤノという女と子供の頃から幼なじみで、数年前から恋人同士で、一年前にわたしに乗り換えた今も未練を持ち続けているという事実をしつかりと把握することができている。

けれどその代わり、わたしの能力消費は完全に持ち出して、長い時間をかけての自然回復を待つしかなかった。

悪魔退治の間隔が長い時にはそれでもよかった。でも今回のように数日しか間がないときは……

「仕方ない、今度は父様の……」

「ん？ 何のことだキサラ？」

「あつ、ううん、何でもない」

別のものを、差し出すしかなかった。

父は、妖狩りの一族の当主だった。

ある時、母がひっそりと暮らす森の中に、十人ほどの手勢を連れて退治に現れた。

母と、父たちは死闘を繰り広げ、最終的に生き残ったのは母と満身創痍の父だけだった。

母は父を殺さず、河の気まぐれか治療を施し、食事を与え、回復まで面倒を見た。

やがて二人は種族を超えた愛に芽生え、数年後に誕生したのが、わたし、イズ……

「よし、これで対策完了。キサラ、お疲れ様」

「……え？」

目の前に、シユウの怪訝そうな表情があった。

わたしの手には、いつもの剣。

地面にはいくつも大穴が開き、園内の木々はなぎ倒され、そこいら中に疲れた様子で後始末をしている警官たち。

「おい大丈夫か？ なんか様子がおかしくないか？」